



雲南と四川の境を流れる長江は、大きくUターンをしている。川幅が狭くなっており、虎が跳んで対岸に渡ることができたというので虎跳峽と名付けられ、観光地となっている。岩壁は削られて舗装され、歩行が容易になっている。バス駐車場からは、観光客用に人力車が出ている。



四川省の省都「成都」は三国志の時代、蜀の都。蜀はまゆの古字であり、現代でも真綿や絹織物業が盛んである。



辺境地域で急展開する ツーリズム・インダストリー

中国は北京オリンピックを控え、いろいろな観点から世界の注目を集めています。とくに環境問題。自動車の排気ガスによる大都市の大気汚染はもちろんですが、重工業中心の重慶でも、四川省の綿陽のような中規模工業が中心の地方都市でも、工場からの排煙・廃水などによる環境汚染が深刻化しています。

日本に暮らす私たちが、改めて身のまわりにあるものをよく見ると、約8割が中国製であることに気づくでしょう。現在、中国は世界の日用品を生産する「工場」といえる国に

なっているのです。こうした状況は、10年、いや5年前には見られなかった、中国の急速な変化だといえます。そしてその変化は、都市から遠く離れた地方にも及び始めています。

私は10数年前から、中国西部のチベット自治区を毎年のように歩き回っていますが、中国の辺境ともいえるこの地域では、観光産業、いわゆるツーリズム・インダストリーが急速に展開しています。豊かな自然を、工場建設によって破壊せず保護し、観光客を集めることを選択したのです。

四川の山岳地域は、観光開発のための道路工事がさかんに行われている。豊かな資金と天然の資源とでインフラを整備中である。



(右上) チベットの東側にある四川省ではチベットの美的な家が今でもつくられている。
(右下) 雲南の麗江は世界文化遺産に登録されている、美しい瓦の家並みの町。道路には礫岩が敷かれている。
(左上) 数年前に、中甸から名前が変わったシャングリ・ラには、チベットのラサリ東ではもっとも巨大なゴンパ(僧院)、松贊林寺がある。
(左下) 四川の「黄龍」は、石灰質の河川がつくり上げた景観が美しい。世界自然遺産に登録された、標高3000mを超える観光地である。



人・環境・建築への旅

中国西部を巡る

自然保護を考える

建築家 柳沢成明

人・環境・建築への旅
China



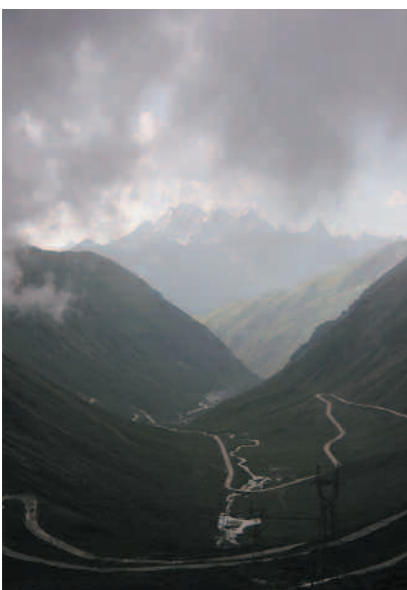
シャングリ・ラの観光地では地盤の上に栈道をつくり、地表を傷めない努力をしている。



中甸からシャングリ・ラに変わった町にも古城(旧町)がある。文化大革命の時、党の事務局として使われていた家。



四川・雲南の新しい観光地では、入り口のゲートのところで入域料を支払い、エコバスと称するバスに乗り換える。



四川の四姑娘山を見るため、途中のパーロー峠を通る。バス道のかたわらに咲く高山植物のなかには、ブルーポビーもある。



新しい観光地なのです。ラサと西寧を結ぶ青藏鉄道は、今や観光客が急増。団体で列車に乗り込み、すぐに酒盛りを始める日本人を見かけましたが、高度障害を甘く見て、ラサに着いてから入院する人もいました。
神秘的なブルーポビーやアツモリ草、氷河や光輝く岩壁、そして谷間に静かに広がるチベット仏教という人間の叡智。変わらぬものと向き合う醍醐味に、環境を守りたいという意識を新たにしない人はいないでしょう。

雄大な自然との対話は 自然保全の意識を高める

ジェイムス・ヒルトンは、「失われた地平線」に、どのようなメッセージを込めたのでしょうか。ヒマラヤ山中に不時着いたパイロットが、チベット仏教の僧侶に救われ、ゆつたりとした日々を過ごすうちに、西欧人が忘れていた「時」というものの貴重さに気づく。ヒルトンは実際にこの地域を訪れたことはありませんでしたが、友人から聞いた話にインスパイアされ、「シャングリ・ラ」という素晴らしい言葉を生み出しました。
この名前は、ホテルチェーンにも使われているのであまりにもポピュラーですが、そのモデルとされる地が、中国のヒマラヤ東端、標高3000mにあることは、つい最近になって日本でもよく知られるようになりました。まさに、中国が走り出し始めたばかりの



雲南のモリ人の村は日本の昔を思わせるが、現在でも「訪問婚」は続いている。

観光整備が環境にもたらす メリットとデメリット

ツーリズム・インダストリーの内容はさまざま、遅れて中国の領土となったチベット自治区などでは、固有の文化が尊重されていないケースもあります。ラサの町の、かつては埃っぽくて曲がりくねっていた道路はなくなり、あのポタラ宮殿の下には、片側3車線の道路がストレートに走っています。以前は板築という土を固めた工法でつくられていたチベット人の住宅は、片っ端から取り壊され、鉄筋コンクリート構造に変わり、チベット独自の泥の文化は消えてしまいました。

しかし、雲南省や四川省の旧チベット国境に近い、チベット少数民族が住むエリアとなると様相は異なります。チベット(蔵)族は、旧中国西部地区の山間部に多く居住していますが、中国政府は彼らに文化的同化を強制していません。それどころか、このエリアを藏族少数民族の特別地域とし、チベット仏教をラマ教と呼んで壮大な寺院を建設し、多くの僧侶を集めて活動させています。さらに数年前には、イギリスの作家ジェイムス・ヒルトンの名著「失われた地平線」のなかに登場する桃源郷シャングリ・ラは、中甸という町であると宣言。一大観光地になったのです。
日本人観光客が多く訪れる四川省の九寨溝や黄龍では、標高3000mを超える台地に空港を建設し、道路を整備。指定した観光地

域にはバスの乗り入れを制限するためにゲートと設け、地表を傷めないように、厚手の木の板を地表より少し持ち上げたところに敷設しています。そのため、雨期に道路を水が流れることがなくなり、自然保護にもつながりました。入場料は環境を維持する費用にもあてられています。将来は、豊かな水資源を生かして小規模な発電を行い、域内を走る車を電気自動車にする予定だと聞きました。
いずれにしても、以前よりホテルの質は高くなり、訪れる人は快適に過ごせるようになりました。しかし、多くの観光客が出すゴミや汚物は、完璧に処理されているのでしょうか。また、山道の多いこの地区では中型以上の自動車に、日本では見られない大きな水のタンクが付けられ、道路には「加水」という看板が立てられるようになりました。「加水」とは、ブレイキ使用頻度が高くなるため、ブレイキシューに水をかけて燃費を節約しようというのですが、モウモウと白い煙を出しながら山道を走る車は少し異様です。



(上) 雲南の麗江は瓦の美しい町。丘からの眺めは息をのむほどの迫力。
(下) 麗江は、雲南南部で産する茶をチベットに運ぶ通過点。この茶の道は茶馬古道と呼ばれている。



(右) 九寨溝では景観を壊さないように湖上に橋がかけられている。
(下) 九寨溝・黄江などの新しい観光地には、アラスカでも見た排泄物を処理しやすいトイレがあった。

